

Title	西域へのあこがれ
Sub Title	My yearnings for Persia and Arabia
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.1 (1971. 11) ,p.97- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集東西交渉史 研究回顧
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西域へのあこがれ

前嶋 信次

— 研究回顧 —

卒論のころ

卒業論文に苦勞するのは昔の学生も、今の学生も同じである。

私は大正十四年の春、父を失い、次の年の秋に母が故郷をさびしがつて東京に出て来たので、下落合の高台にささやかな貸家をつき、親子二人だけの暮しをはじめた。十一月のはじめで、あのころの落合あたりはまだ雑木林も草原も多くて静寂だった。

その家は農家の屋敷の一隅にあったが、家主はいつからか植木屋に転業しており、私たちの借りた家も植木の茂みの中にあった。小路をへだてた前は広い空地で草原になっており、その向うは大きな屋敷であった。またその方へ向いて右手はかなり深い谷間になっていて、対岸はこれまた広大な庭で、牡丹の名園があった。なんでも紀州の徳川家の持ものだということがあった。

西域へのあこがれ

丘の上の途を西の方へしばらく行った林間の古びた家に秋艸道人会津八一先生が住んでいられた。ある日、同学の志田不動磨君とともに、会津先生のお話をうかがいに参上したことがあった。椽側には沢山の小鳥の籠があり、部屋の中には雉子車とか、その他いろいろの郷土玩具が所せまいまでにならべてあった。

その日、先生は志田君と私とにさらさらと「南京新唱」中の和歌を一首づつ書いて下さった。私が頂戴したのは

つねにみし てらにはあれど あきのひに

もゆるいらかは けふみつるかも

というのだったよう記憶する。これは大切にしまっておいたのだが、それから半世紀近くたったいまどこへ行ってしまったものか発見し得ないのである。

下落合の僑居のことと卒論の思い出とは密接に結びついている。はじめはマルコ・ポーロの書について、何かまとめて見たいと思っていた。そのころはまだ岩村忍、愛宕松男、藤枝晃などというこの方面の大家が現われていない時代であったし、テキストもポーティエのやウルとコルディエのものなどが、一番よいとされていたのである。

東大の東洋史研究室にウルとコルディエの二巻の大冊が置い

てあったから、助手をつとめていられた三島一先生に貸出しを依頼した。すると三島さんは「これはまことに貴重書であるが、卒論にとりあげるならばよろしい。貸してあげよう」という風に承諾して下さった。しばらくの間この大著ととりくんで見たけれども、どこをどのようにして論文にしてよいものやらさっぱりわからないので困ってしまった。

その結果が藤田豊八先生の池袋の御邸に参上し御意見を仰ぐという事になったのである。これは拙著「東西文化交流の諸相」の巻末に書いた「迂遠の途を辿り来て」にも記したごとくである。藤田先生は中国の回教の重要性を諄々として説かれたのち、ダブリー・ド・ティエルサンの「シナにおけるマホメット教」二巻を貸して下さった。一八七九年にパリで公刊されたもので、仮綴でブルーの渋い表紙の本だったように記憶している。このごろではマホメット教というような言葉はつかわぬのが普通であるが、まだそういう呼称のつかわれたころの本なのであった。

この二巻をかかえ、練馬の大根畑の中を歩いて下落合の家までかえって来たが、あのころの長閑な東京近郊の風物は忘れがたい。ダブリー・ド・ティエルサンにより、中国の回教について一通りの知識を得たし、さらにブルームホール、ヴィッシェール、

ドゥヴェリア、ハルトマンなどの研究があることをも知った。

しかし、卒論は中国の回教史そのものとならずに、「西域における唐と大食（アラブ）との関係」といったものを中心とする事になった。そのように固まるまでに、どういう経過を辿ったものか、その辺のところがあまりはっきりと記憶に残っていない。そのころ駒込の上富士前に近く東洋文庫が落成し、開館式のお祝いには、私たちが受付けとか廊下の案内係などの雑用に召集されたのである。

東大の図書館は関東大震災で焼けて、まだバラック建ての粗末なものだったから、この新しい東洋文庫にもっぱら通い、タバリーの年代記をゾータンベールの仏訳で（これはサーマン朝の宰相バルアミーのペルシア語訳から重訳したものであることは、ここに断るまでもないであろう）、マスウーディーの「黄金の牧場」九巻をバルビエー・ド・メイナールとパヴェ・ド・クールテイユの仏訳によって読んだり、新旧唐書、冊府元龜、資治通鑑、唐会要などというものから必要箇所を書き抜いたりしていた。

当時松田寿男君は天山山脈方面の歴史研究を熱心に続けていたが、目黒駅から近い上大崎長者丸の大きな屋敷に住んでいて、きわめて豊かで蔵書も多かった。そのころは、甚しく高価だった冊

府元龜一千卷まで自宅に備えてあったようで、下落合の丘の上
わび住居する私などにとっては羨しい限りであった。

それでも新旧唐書などは、本郷一丁目にあった文求堂から五局
合刻本という唐本をとり寄せた。文求堂の使丁が大きな風呂敷を
背中に、丘の小路を登って届けてくれた情景などをありありと思
い出すのである。資治通鑑は和刻本を安く買ったが、調べて見る
と大部欠本があることがわかった。松田君は、そのころ上海の商
務印書館かどこかで出した字の大きなまことに感じのよい新本を
書いてこみ「年表がわりにして、どんどんと書きこみなどするに便
利だ」というようなことをいってこれも私を羨しがらせた。

もう一つ大に羨しがらせたことがあるが、それはつぎのような
ことである。そのころわれわれは B. Laufer の「シノ・イラニ
カ」なる名著に憧憬を抱いていたが、容易に手に入れうるもので
はなかった。ラウファー（ローファー）が正しいのかも知れない）
の別の書である「ジェイド（玉）」などはそのころ八〇円位した
のであるが、これは大学の一年間の授業料よりも高かったし、ま
た中々手に入れ難くなっていたようにも思う。

ある日、神田の古書店あさりに出かけ、駿河台下から神保町へ
むかっていく途中の一軒で、白いカヴァーをかけ「支那植物字典」

西域へのあこがれ

と墨書してある本を見た。よほど棚から抜き出して見ようかと思
ったのだが、やっぱりやめることにしてその店を去った。

それから一二日して、松田君が「神田でラウファーのシノ・イ
ラニカを安く買った」というので、たずねて見ると「支那植物
字典」というカヴァーがしてあったので、何かと調べてあらため
て見たら、あの本だったということであった。つまり期せずし
て、同じ日に同方面に古本あさりを二人して行い、私の方が少し
早く、しかもその本に心をひかれながら、一寸手にとって見ると
いう労をはぶいたために長蛇を逸し、松田君の方は首尾よく手に
入れることが出来たのであった。この本は現在では覆刻本も出ま
わっていて、楽々と手に入るのであるが、当時はこれを逸したこ
とを、文字通り地団駄踏んで残念がったほどに貴重だったので
ある。

アラビア語の師を求めて

東洋文庫で知りあった友人には小林元君もいた。或日、書見し
ていると、白い緋の着物にだらりと袴をはいた男が「僕は東大で
西洋史を専攻しているものだ。アッバース朝史を卒論にとりあげ
ようと思うんだけど、アラビア語が読めんでこまってるよ」な

(九九)

九九

どと話しかけた。イスラム関係の歴史を勉強するにはどうしてもアラビア語の史料を読まねばならぬと力説するのだったが。その必要なことは、私にもそろそろわかって来ていたから「どこかに教えてくれる人がいるだろう。さがして見ようではないか」と相談がまとまり、二人してそちこちと歩きまわったことがあった。まるで雲をつかむような話であったが、よくしたものでその場所はよく思い出さなければ、軒にアラビア文字の額のようなものを掲げている家を探しあてたのである。

そこへは行ってアラビア語を教えてくれるかどうかたずねて見ようということになった。小林君がまずはいっていき、なにか話していたが、やがて出て来て、「駄目だそうだ」といった。なぜ駄目だったのか、そのところがどうも思い出せないのである。

下落合の家には行って、まもなく寒くなり、その年の暮に大正が昭和に変わったから、おそらく、あれは昭和二年の春ころのことだったかも知れない。一九二七年にあたるから、そのころアラブの独立国というと、サウディ・アラビアにイエメン、それからまだ英国の勢力下にあったとはいえ曲りなりにも独立していたエジプトくらいのもので、わが国人のアラブ族やアラブ文化に対する関心はまことに稀薄だったのである。外務省がアラビア語の研究生

を現地に送り出すようになったのも、それからもう少したってからであったろう。

そのころ、コロンビア大学に永年留学されウィリヤム・ジャクソン教授についてペルシア語を修めてこられた荒木茂先生が、東大の言語学科の講師として来ておられた。江上波夫、増井経夫、野原四郎の諸君とともに聴講したが、ある日、アラビア語の文典はなにがよろしいでしょうかと質問すると「さあ、アラビア語のことは即答できかねるが、調べておきましょう」ということであつた。つぎの時間に「ライトのがいいでしょう」と教えて下さつた。それで日本橋の丸善(あのころは駿河台下にも支店があつた)へ行つて見ると、ちゃんと二巻のライトのアラビック・グラマーが備えてあるので感心したものであつた。

そんなことをしているうちに、いつの間にか私はアラビアにとり憑かれていた。アラブとかアラビアという文字があると、それが新聞の中であれ、書物の中であれ、いきなりパツと心に感光するのである。砂漠をゆく遊牧アラブの写真などを飽くことなく眺め入ったりしたのである。「およそアラブのことであれば、すべてを知りたい。アラブに関しないことは何一つ知りたくない」というような意味のことをイタリアの生んだ卓越した東洋学者ナッ

リーノ（カルロ・アルフォンソ。一八七二—一九三八）が云っているようである。それほどに徹底はしていなかったけれども、当時の私もたしかにアラブマニアであった。

ギップとのめぐり合い

H・A・Rギップにめぐり合ったのは、大正の終ころ、冬のことであったと思う。バラックの東大図書館の入口から突当たったころ、貸出係のいるすぐわきに、金網をへだて新着の図書の間並んでいる棚があった。ある日、その中に草色表紙の薄い少し大形の本があつて、その背に *The Arab Conquests in Central Asia* とあり、その著者は H.A.R. Gibb としてあつた。これは自分が卒論の題目として選んだものに、まさにぴたりではないか。早速に借り出して、白木の穴だらけの長腰掛の一隅にすわり、同じような粗末な長机の上で、その本を開いて読んで見たが、よくわからない。文章も晦渋だし、引用してあるナルシャヒーとか、イブン・アル・アシルだとか、バラツツリーなどという史家が一体どこでどのような位置を占めているものなのか、さっぱりわからないのである。

これまで、自分でやって来たのは、どうしても中国の側にたつ

西域へのあこがれ

て見るという方法であつたが、このギップは全くアラブ側からその中央アジア征服の歴史を眺めているのである。中国の史料をも利用しているが、それはエドゥアール・シャヴァンヌの「西突厥史料」その他、ヨーロッパの東洋学者の翻訳しているものに限られている。しかし、アラビア語史料の駆使にいたっては、実に該博で精密であつた。しかも、この論文は同氏のマスター・オヴ・アーツの学位論文であるというのである。そうして見ると、まだ若い人なのだが、よくこのような仕事をしてきたことよと感歎せざるを得なかつた。そこで、幸に大部の本ではなかつたので、図書館に通いつめて何回か読みかえして見たところ、よほど内容のみこめて来た。アミール・クタイバのことが重要な部分を占めているが、これは冊府元龜外臣部の康国（サマルカンド）王烏勒伽（グーラク）が唐の玄宗におくつた書翰にも畏密屈底波という大食の元率として出ている。（一九七一年春、大沢一雄君とサマルカンドからペンジケントに赴いたとき、その博物館でグーラクが鑄させた貨幣を見て昔をしのんだ）。なるほどギップの論文はよく出来ているけれども、もっと精密に中国史料を利用すれば、まだまだ新しい領域は開けそうだという見当がついたので、心は楽しくなつた。

しかし、この一書でギップは忘れ得ぬ人となり、いつも折にふれて思い出されるのであった。その後、私は学窓を出て、台湾に流寓し、坎坷落々として学業も秋毫に似て細くなりゆくのみであったけれども、ギップの方はつきつきと業績をあげ、やがて、推しも推されもせぬ世界におけるアラビア学の第一人者となった。私は日の当らぬ人生の小途で霜柱の上に蹲ったり、晩秋のうすれ陽をあびたりしながら、彼のつきつきに出す著書や論文を読んだものであった。

一九六一年、私はプリンストン大学の東洋研究科に寄寓していたが、アメリカン・オリエンタル・ソサイティの年次大会がペンシルヴェニア大学で開かれる由をきき、キューイラー・ヤング教授の紹介で、同学会の会員に推薦していただき、フィラデルフィアに出かけた。三月下旬で、やっと春の気配が動きそめて来たころであった。プリンストンから、トレントンまで支線が出て、あそこで乗りかえると、フィラデルフィアまではもうあまり遠くない、フランクリンがはじめて建てたとかいう大学の会館のようなところにとめてもらったが、夜半に寒気に苦しんだことを思い出すのである。

会場は大学の博物館であり、前庭に池のある立派な建物であつ

た。その年の大会にはハーヴァードの教授となっていたギップをはじめ、カリフォルニア大学のフォン・グルーネバウム、エール大学のローゼンタール、主催校のゴイティンなどがみな出席して仲々にぎやかであった。学生時代から、ひそかにあこがれを寄せていたギップ博士を年老いて、はじめて目のあたりにし、その語るところを直接に耳にしたことは、何という感慨深いことであつたらう。しかし、そのとき私はすでに五十七歳になっていた。二十二、三歳ではじめてこの人の論文を耽読したときから三十余年の歳月が過ぎていた。正直にいえば、それはあまりにも長すぎたのである。せめてもう十年も早く、この人と相会う機会があつたならば、或は自分の研究も少しく別方面を開き得たかも知れなかつたのになどと惜しまれるのであった。この大会にはやはりハーヴァード大学で研究中の山田信夫氏（大阪大学教授）も参加され、二人してチェスナット・ストリートを歩いたり、自由の鐘や造幣廠その他を見物したり、北米の古都の春色を数日にわたって楽しんだことを懐しく回想するのである。

岑氏の蒙を怒る

「東西文化交流の諸相」中に「カスピ海南岸の諸国と唐との通

交」という一篇があり、卒論の一部であると附記の中でことわつてある。卒論の資料を集めているうちに、唐書地理志附録や同書卷二二一下の大食伝に勃達・涅滿・羅利支・都盤・岐蘭などという西域の国が唐に使をよこしたとあり、それらの国々のお互の間の行程や方向なども記してあるが、今のどこにあたるかさっぱりわからず、どこか魏志の倭人伝に出てくる日本のいろいろな小国についての記載にも似て、謎めいた文章なのである。もてあましていたが、ある日、松田寿男君との話の間にこのことが出ると、松田君は「これはわからぬはずはない。考えているうちに、段々に解けてくるにちがいない」というようなことを強くいわれた。この一言で発奮していろいろと考えているうちに、東洋文庫でイブン・イスファンディヤールのタバリスタン史をE・G・ブラウン（一八六二—一九二六）が英訳したのを見つけた。この本によつて右の諸国を大体において比定し得たと考えたので、卒論のうち的一篇に加えた。その後五年ほどして中国の岑仲勉氏もこの問題をとらえ「唐代大食七属国考証」を発表したが、私とは大部考を異にしている。岑氏は私の論文の発表されたことも知っていたが、(ツンパオにポール・ペリオの簡単な紹介が出たため)、何の雑誌にのつたかわからぬので一読の機会を得ないが、たんに

西域へのあこがれ

カスピ海南岸諸国と題しているだけでも主旨すでに誤っていることがわかると断定しているのである。岑氏の論文を一読するに、イラン方面に関する知識は浅薄であつて、同氏の方がつまらぬ考え違いを重ねているといわざるを得ない。その後、タバリスタン史に関しては、いくつかの論考が発表され、またかの地方にゾロアストル教の諸国が残存したところの古泉なども多数発見されている。こういうものをつかいこの論文を書き直そうと思つたこともあるが、結論はこの若き日のものと殆ど変らぬのでそのままにして今日に至っている。もし後日、時間を得たならば、そのような史料をもつて補足し、岑氏の蒙をひらかねばと執念をもやしている。この問題に関する限り、私は少しも遠慮する必要はなく、十分に論破し得るだけの材料を持っているものと、潜越といわれるかも知れぬが、秘かに気負っているのである。

ユアール文庫との邂逅

下落合の丘の上の生活は卒論作製とからまり、きわめて印象深いものであつたが、満一年五カ月ほどで終つてしまった。座敷に机をすえ、資料を整理したり、原稿を書いたりしていても、周囲の武蔵野の四季の移りかわりがしみじみと感じられるような環境

であった。たとえば梅雨のこまやかに降りこめる日など、紙にインクがにじむほどの湿気であるが、爽かな秋晴れの日などは、前原の草生の枯れていくかぐわしさが部屋にたちこめ、まれにはいたちか何かが椽先をかけぬけたりするのであった。

昭和三年の春、卒業と同時にその年から開かれた台北帝国大学の助手として、台湾にゆくことになった。指導教授の藤田豊八先生が同大学の文政学部長となられたのによるのである。文政学部というのは、文学部と法学部を併せたようなもので、理農学部と並んだものであり、数年して別に医学部が加えられた。神戸から瑞穂丸という船に乗り、途中三泊して四月一日に基隆港にはいったが、この船には初代総長幣原坦博士をはじめ、台北大学に赴任する人たちが大部乗っていたようである。私はすでに二十四歳になっていたが、まだ世間をよく知らず、ことに日本の帝国主義がどんなものか、そのもとに支配されつつある台湾の数百万の住民が、それをどのように受けとめているかなどという深刻な問題に對しては嘘のように無関心だったのは、今考えるとまことに恥しいことであつた。

台北に着いて間もなく矢内原東大教授の「帝国主義下の台湾」という書が、現地では禁書になっており、総督府の文教局などで

はこれを反駁するような本を誰かに書いてもらいたがつているなどという噂が流れていることなども知つたのであるが、そのような事よりも、フランスの東洋学者クレマン・ユアールの旧蔵書が一まとめになって台北大学に送られてくるということの方が私などには重要と思われたのである。ユアールの「アラビア文学史」とか「古代のペルシア」、「アラブ民族史」などという著書は現在ではそろそろ忘れられかけているようだが、当時はまだ新鮮さをもっていた。その人が世を去つたのは一九一九（大正八）年のことである。それから、どのような経緯があつたものか知らぬが、蔵書はライプチヒのグスタフ・フォックという書店にはいり、そのマクス・ワハター氏が開校まもない台北大学に売りこみに来たのである。当時の金でたしか五万円とかいうのであり、それは中々の大金だったが、藤田先生の尽力で、同大学図書館で購入することになった。購入と決したとき、その旨をワハター氏に伝えるに、台北駅前にあつた台北ホテルに赴いた使者が私であつた。

やがて大きな木箱でいくつがのいわゆるユアール文庫が到着した。まだ図書館の建物は出来ておらず、もとの台北高等農林学校の一部で荷がほどかれた。アラビア語、トルコ語、ペルシア語などの文献はもちろん、多数のパンフレット類まではいっていた。あ

のころ、このような文献は、まだ東洋文庫にもあまり多くはなかったから、おそらくわが国で最初の西アジア学の文献集であったろう。

そういうものを使って、自由に研究を進めることが出来るということは、まさに宝の山にはいったと同じであるが、気候は湿熱であるし、それに新設の大学というものは落ついた環境をととのえるまでが大変なものであることがわかっただけである。

それにまたアラビア語、トルコ語、ペルシア語など、どの一つをとつても、そう易々と読みこなせるほどの学殖を蓄えるのは容易なことではないし、そういう学問の伝統が日本には皆無といつてもよいのであるから、ただ茫然とするばかりであった。しかし藤田先生としては、西アジアの文献はこうして纏ったものが舶載されて来たので、こんどは、漢籍をそろえねばならぬと考えられたようである。そのためには御自分で北京まで出むこうかというようなこともいわれたよう記憶するが、学部長といういそがしい任務もあって、そのままになっているうちに、長沙の葉德輝の旧蔵書をどうかという話があったらしい。その目録は「観古堂書目」といって有名なもので、「これなら是非ほしい」といって先生が目録を愛撫するようにして悦に入っていたいられたことをかすかに思

い出す。葉德輝が蒋介石等の北伐軍の過激分子のため虐殺されたのは一九二七（昭和二）年のことであった。彼は生涯にわたり力を古書の収蔵と校勘にそそいだといわれたほどの文献通であり、「書林清話」十巻は早く世に現われ、死後に未完の「書林余話」二巻が印行されている。

しかし、惜しいかな葉氏の旧蔵書はついに台北には来なかった。なにせよ、長沙からはるばると揚子江を下って上海まで来てから、また台湾に転送されるので費用もかさむのである。仲介したのは誰だったか知らぬが、相当額を先払いしてもらいたいというような事だったらしい。しかし、大学図書館で買入れる場合、総督府としては現品がとどいて、目録との照合など、受入手続きがすまぬと金は払い出せぬというのであり、その折合がつかず、そのうちにも葉氏の蔵書は長江を下り、上海あたりで分散の運命にあったのではないかと思うが、その辺の詳しい事情は私はよく知らされていない。いずれにせよ、これは藤田先生をいたく歎かせた恨事だったのである。そのころ、台北の風土が先生の御健康に合わず、昭和四年五月末ころに東京にもどられ、七月には池袋の御邸で永眠された。暑苦しく、そして寂莫たる夏の日のことであつた。

華南文化へのあこがれ

その年の秋から冬にかけて、私は神田喜一郎博士のお供をして福州に赴いた。朝夕、博士からいわゆる「支那学」のこと、内藤湖南博士の思い出、その他のお話をうかがいつつ榕城（福建省城）の風物に接し、その人々と交わったりしている間に、心は西域と遊離し、南シナの文化の魅力にとりつかれてしまった。これから帰台したあとも、中国の社会や文献が強く心をとらえてしまい、あれほどのアラビア熱が、その奥にとじこめられてしまったような傾きがあった。

こんなことをして、じんぜんとして南海の一隅に流寓している間に、東京を中心にイスラム研究の風潮が油然として湧き起って来たようであり、友人たちの便りにもしきりにそのようなことが伝えられたのである。

昭和七年二月には、東京にイスラム文化研究所が設立され、その年十一月には機関誌として「イスラム文化研究雑誌」を創刊した。この研究所も雑誌もまもなく消えてしまったが、昭和十二年の十月になるとイスラム文化協会から「イスラム——回教文化——」という雑誌が発刊され、三カ月に一冊位の割合で翌年末まで続い

た。「イスラム」には小林元君などが加わっており、私も発起人の一人ということになっているが、実際は遠く台湾海峡の潮騒を聞きつつあるところで何にも知らぬうちに加えられたというのにすぎない。

昭和十三年の夏に東京に来て見ると、目黒駅からさして遠くない所に大久保幸次氏を所長とする回教圏攷究所（のちに回教圏研究所と改称）が設立されていた（同年五月創立）。小林元君が研究部長、松田寿男君が資料部長だったかと思う。現在、中東調査会の理事長をしている岩永博君（法政大教授）なども若手の研究員の一人だったように憶えている。ここでは月刊で「回教圏」という雑誌をその年七月から出しており、私も「突騎施の戦歴」「舍利別考」その他をこの雑誌に寄せた。それから一年後の夏に、また上京したとき大久保、小林二氏から、この研究所へ入るよう勧められた時の事情は、すでに「迂遠の途を辿り来て」に書いた通りであるが、そのときにはすでに松田君は同所を去っており、その後間もなく大久保・小林二氏の間に関裂があったし、野原四郎、竹内好などの諸氏が参加したりしたのである。いろいろと変遷はあったが、この研究所は二〇年の空襲で焼けるまで活動を続けており、戦後学界に名を成した人たちを数多く出しているのである。

また昭和十四年四月からは大日本回教協会が月刊誌「回教世界」を出しはじめ、十三年からは外務省調査部では季刊「回教事情」を、満鉄東亜経済調査局も十四年秋から月刊「新亜細亜」をそれぞれ世に送りはじめた。「新亜細亜」は坂本徳松氏が論集長で、イスラム研究のみに限られてはいなかったが、新鮮な企画によったものであった。昭和十三年から同十九年にかけては、わが国のイスラム文化研究はたしかに空前の盛況を示した。これは当時の戦局の発展から、一般の関心がその方へ向いたためでもある。戦争の終末とともに、これらの諸刊行物も廃絶され、研究者も多く姿を消してしまつたが、現在からふりかえって見ても貴重な文献が数多く残されたことは否定出来ない。戦後に現われ、今のイスラム研究の中堅となつている人たちの仕事は、もちろん、あのころよりも大いに歩を進め、その業績も精緻さを加えてはいらるが、戦争中の研究と全く無縁のものとはいひ得ないようで、両者の間にはかなり深い因果関係があるものと私は信じている。

フェランの旧蔵書とともに

昭和十四年夏に私は基隆から大連にむかつた。船は山東丸といつたように記憶するが、四千トン位の老朽船であつた。上海の沖

西域へのあこがれ

で暴風雨にまきこまれ、船も解体するのではないかと思うほどの物凄さであつた。そのようなローカル航路のこととて、一等船客といつても五六人の相部屋であり、昔はよく見かけた支那浪人型の豪傑やら、温和のようで底の知れぬほどの度胸の持主らしい中国商人などがいて、それらの話を聞いているとこのような世界もあつたのかと思うほどに興味が深かつた。また婦人室には台湾から満州のどこかへお嫁いりの途中の美少女とその附添いの人たちもいるとのことであつた。

とに角、九死に一生を得て、やっと静かな海に出て、深夜に山東半島の突端をめぐつた。「燈台が見える」という叫びがして、眠りに入つた人たちが急いで甲板に集つた。日中事變の最中であつて、敵のものか、味方のものかは知らぬが、はるかかなたの岩壁とおぼしいところから、ピカリピカリと燈台の光がまたたくように見えていた。あの奥では二つの民族のいたましい死闘が展開されているのであろうが、燈台の光はそのようなことにかかわりなく、人間の孤高さと慈悲への念願などのこもつたなつかしいものに思われた。

ふと側を見ると深紅の服に身をつつんだ支那の花嫁が一人の老女とともにじつとその燈台の方へ目をこらしつつ佇んでいた。い

までも私は、あの戦乱の大陸へ楚々として、とついでいったあの乙女が、その後どのような運命を迎えたらうかなどと思ひ起すことがあつた。

大連、旅順、金州などを見てまわつたが、たしか旅順では嶋田襄平(中大)教授の嚴父のお世話になり、金州では建国大学教授の岩間卓也という学者の家を訪れた。折しも北京から来ておられた橋川時雄氏と同期し、甲骨文の蒐集や、おびただしい中国の名士たちの書翰や書画などを拝見し、さらに、その地の古風な料亭で御馳走になつたりした。嶋田さんは旅順の博物館長ではなかつたかと思うが、そのころまだ少年だつたであろう令息が、のちにイスラム学にはいろいろとは、もちろん夢にも思わなかつたのである。また大連の満鉄のホテルで開かれた北京から来た少壮学者を囲む会というのにも出席した。台北大学の助手だつたころ、同僚の木下広居(創価大学教授)、宮本延人(東海大学教授)諸氏とともに、一人の客家系の青年にたのんで北京語を教へてもらつたことがあつた。その人の名はいま思い出さぬけれども、あの蒲寿庚の兄寿茂が知事をしていたという広東省の梅県の出身だということであつた。意外なことに当日、大連のホテルで通訳の任にあつたのが、その某君だつたのである。あのころから早くも

十年の歳月が経っていたが、そのような懐しい人を見ても、私がかくれるようにしてついに言葉をかけなかつたのにはつまらぬ理由があつた。それは、われわれに懇切に北京音を教へてくれたのに、なにかの理由で祿な謝礼もせずそのままになつてしまったためであつた。このことが心のひげめになつていたため、ついにこの再会を相手に気づかれぬままにしてしまつたのである。

その人の名はさて何と云つたのであろうか、いまはどうしても思い出せぬのであるが、その人がつかつた教材の方ははっきりと記憶しているから奇妙である。それは「中国語法綱要」というもので、いまでも私の書架のどこかに残っているはずである。

ある日、私はふたたび大連から船に乗り、こんどは黄海を越えて塘沽に上陸した。この旅に出る一年半前くらいから、台南に住む崔という一婦人から北京語を教へてもらつていた。崔さんは繁昌する医院経営者の夫人で、北京の生れ、北京大学に学んだということであつた。旅順あたりで、農夫らしい人をつかまえ、崔夫人伝授の北京語をつかつて見たが一向に通じなかつた。しかし塘沽について、駅長さんらしい悠々寛々たる制服の大人がいたので話しかけて見ると、実によく通じた。北京にはいると、人力車夫でも、街頭の物売りでも気易くこの言葉で話せるので、やっぱり崔

さんは北京子だったなあと今更のごとく感心したものであった。

そんなわけで宿も中国人のものに泊り、まことに楽しい滞在をすることが出来たが、あれからまた汽車で山海関を経て、奉天（瀋陽）に出た。さらに新京からハルビンくらいまでゆくつもりのところ、折からノモンハンの戦争が起り、風雲急で、ただならぬ気配となって来たので北行は中止した。

奉天から安東に出て、数日間をすごしたのち、平壤、京城（ソウル）、慶州と泊りを重ねて、やっと東京についたのは八月末であった。「迂遠の途を辿り来て」にも書いたことであるが、中村孝（現天理大）教授からの手紙が義兄の家に回送されており、満鉄東亜経済調査局を訪ねよということであった。

新橋の東拓ビル三階にあった同調査局に主査片岡気介氏を訪ねると、フランスのガブリエル・フェランの旧蔵書など数千冊を買い、近々に到着するから、それをつかってイスラム文化の研究をしないかということであった。そのとき顧問の大川周明博士にも会ってくれということで、その部屋に通された。私はいが栗頭をして、服装は言葉通りの粗衣であり、かつ長い旅でやつれていた。満三十七歳に達したばかりではあったが、自分ではもはやかなりの老境に入ったような心持でいた。

西域へのあこがれ

私がいっていくと、瘦軀長身の老紳士が立ちあがって、にこやかに、しかも懇慫に答礼してくれたので、こちらは恐縮してしまった。短時間、私の研究経験などをきくと大きくうなづき、「結構です。有難う」といわれた。これで私の東亜経済調査局入りが決定したようなものであった。そこにいたのはそれから終戦の時までであるが、よく私のようなものを待遇してくれた。俸給は台湾時代よりもかなり増し、資格も所員、調査員、副参事というように、一二年ごとに上っていった。

ガブリエル・フェランは一八六四年に生まれ、アルジェーの大学でルネ・バッセ（一八五五—一九二四）についてアラビア語などを学び、マダガスカルに赴いて、そのムスリムたちと交り、のち、タイ、イランなどにも滞在し、やがてインド洋周辺の歴史地理的研究で続々とすぐれた論文を発表し、一九三五年に世を去っている。その尨大な蔵書はライデンの Brill 書店の書庫にはあったが、東亜経済調査局に来たのは、そのうちの一部ではないかと私は思っている。なぜならば、Brill で出したフェランの蔵書目と照し合すると、日本には来なかったものもかなり多数あることがわかるからである。

しかし、わが国にもたらされた纏った西アジアの、またイスラ

ム関係の文献としてはクレマン・ユアールのものについて大きな蒐集であったと思われる。この文献は戦後、アメリカに持っていかれ、現在ではコンGRES・ライブラリーの所蔵となっているという。一九三七年、ミシガン大学で国際東洋学者会議がひらかれたあと、私も二三の知友とともに、同ライブラリーの書庫にはいて、そのことの事実かどうかを確かめようとしたが、もはやまとまったままにはなっていないようで、はっきりした所在はわからなかった。

井筒博士とボストン

井筒俊彦博士と知りあったのはそのころのことである。井筒さんはそのころはまだ二十七八歳の若さで、慶応義塾大学の助手ということであったが、すでに「アラビア思想史」というものを執筆中であった。よく第一ホテルと一緒に食事したりし、また一緒に代々木上原のモスクやその近くに住むイブラヒムとかいうトルコの学者を訪れたりしたこともあった。アラビア語を流暢にあやつり、その学才は底が知れず、将来はどのような境地を開くであろうかと感歎にたえなかったのであるが、それから三十年たったいま、果して世界的スケールの学者に大成されたのである。ある

日、村上信彦という人の小説を貸して下され、このごろ愛読しているものだが、是非読んで見てはといわれた。一読して見たが、どうも格別に心を動かされることもなかった。あのような本を愛読されたことは、井筒博士御自身もはや忘れていられるかも知れないが、そのような若き日もあったのである。

それから二十年して、昭和三十六年の春、私がプリンストン大学にいたころ、ハーヴァード大学に滞在していた井筒さんがわざわざ訪ねて下さった。「プリンストンの春」という写真集が出ているほど、あその春は花に包まれて美しい。そのころの井筒さんはすでにかのコーランの意味論的解釈などによって専門の学者たちにはよく知られた存在であり、クリチエクその他の人々によりプリンストン・インで歓迎の小宴が設けられたりした。

一泊して帰られる日は、私は一緒にバスでニューヨークまでいき、Believe it or not という下手ものをならべた博物館などを見たり、イタリア人のレストランで昼食したりしてから別れた。春爛漫の長閑な日で、ブロードウェイなど大変な人出であった。

五月下旬、私の方からバスでボストンまでいき、そこからケンブリッジのハーヴァード大学に近いブラットル・インを訪ねていった。そのかなり広々した何室かを井筒夫妻が借りておられた

ので、一週間ほど御厄介になった。すぐ近くにロングフェローの故宅や、その詩に出てくる村の鍛冶屋のあとなどもあるというところ、夫妻はまだ行ったことはないというのであった。

それから夫妻に案内してもらって、リラの花につつまれたロングフェローの家や、ボストン美術館、コンコードのエマソンの家やらソローがその近くに幽棲したというウォールデンの池、レキシントンの古戦場などを訪れたりした。エマソンの故宅を見て

コンコード ひじりの庵いぼ とめくれば

窓へもくらく リラの花さく

という歌をつくったりして楽しんだ。研究にせわしい井筒夫妻にとっては、この一週間は定めてわずらわしいことであつたらう。

今度「史学」に私の定年退職を記念する意味もこめて、東西交渉史特輯号をつくってくださることになった。編集にあたられた伊藤清司教授はじめ、史学科の先生方の御厚意を深く感謝している。またこれに御多忙中をも顧りみず珠玉の御論考を御寄せ下された松田、三上、三橋諸教授や新進の同学の諸君にも幾重にも御礼を申し上げたい。

伊藤教授からは、「迂遠の途を辿り来て」に書かなかつた研究

西域へのあこがれ

回顧のようなものを書くようにとお話であつた。私としては東洋史という領域に入りながら、なぜ西へ西へと心を走らせたかの経過を詳細に思いかえして見ようとしたのであつたが、回顧というもの、とかく傍路にそれ易いものである。

むかし読んだ国木田独歩の「武蔵野」にある雑木林の中の小途を散策する話にも似て、興にまかせて、どちらに曲っていったらまいか自分にもわからぬのである。

幸いにして井筒夫妻とともに、コンコードの丘をさまようところまで書いて来たので、この辺で筆を擱くことにしよう。よき友だちと異国の丘をそぞろ歩く愉しさは何ものにも換えがたいであろうが、年老いていまはこれという責務もなく、ひょうひょうと野をゆき山をゆく、いわゆるプロムナード・ソリテールもまたしみみとしてよいものではあるまいか。私もまた残年を歴史の林間の途の孤独なさすらいにすごしていこうと思つている。そうして、その途がいかに細くたどらざらば、東と西とをつなぐものであつたならば倅せであらうなども考えるのである。